

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4360290003		
法人名	(有)あい		
事業所名	グループホームあい		
所在地	熊本県八代市島田町863-3		
自己評価作成日	平成27年10月15日	評価結果市町村受理日	平成28年3月4日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kai gokensaku.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなろ福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本3丁目13-12-205号
訪問調査日	平成27年11月5日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者はもちろん、その家族やスタッフ、あいで出会った人たちそれぞれの個性を受けとめ、又認め合える場所でありたいと思っています。大家族としてお互いを思いあえる、支え合える関係を目指し、事業所の理念である”我のままに暮らす”こととは何かを追い続けています。最期までその人らしく、そのために自分たちに何が出来るのか、ひとりひとりに思いを馳せることが出来る事業所でありたいと日々努力しています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

縁あってホームに入居された一人ひとりに家庭的な雰囲気の中で支援に取り組むホームの日常は、飾らず気取らず、ゆったりとした中にも活気ある時間が居心地の良さにも繋がっている。今年度支援された終末期支援では、自宅を中心としてチームを編成し本人と家族の思いに応える最期が支援されている。日常で使う用紙1枚、洗剤一つにしても大切に使用することは、入居者の支援にも通じるものと、職員は意識を持って業務にあたっている。日差しの入る居室で手際良く丁寧に洗濯物をたたまれていた女性入居者の後ろ姿にも、ホームの日常が表れていた。で、あいから始まり、ホームで日々ふれあい・支えあい・慈しみあいの光景と、生き生きと働く職員の姿は家族の安心と信頼に繋がっており、これからもひとつ屋根の下で職員のチームワークを活かし最良の時間を提供する『グループホームあい』の変わらぬ取り組みが大いに期待される。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	会社として理念、又当ホームとしての理念があり、会社の全体集会等で振り返りを行うと共に、実践のケアの中での疑問を通し、その時に振り返りが出来るように心掛けている。	ホームは管理者交代により新体制のスタートを切っている。これまでの基盤をもとに新たに理念を振り返りたいとして早期に取り掛かる考えである。入居者の発した言葉から生まれた理念は現在も引き継がれ、支援の柱として職員の中に浸透している。運営推進会議を通じて家族や地域へも啓発されている。	施設長は理念である『私のままに』と『我がまま』の違いについて、今後も職員の意識を図りながら、入居者の思いに応えたいとしている。入居者主体の支援が今後も進められていくことと思われる。期待したい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町内会に加入しており、会社としても地域の行事や清掃への参加をしている。「さくら会」「ふれあい花畑」の2つのふれあい事業を行い、職員も地域の方々顔に覚えてもらえる状況にはある。	ホームは開所時より地域行事に積極的に参加し、自治会の加入により回覧板等のやり取りをしている。新幹線開業に伴う新駅の登場は地域の活性化に繋がり、周辺の美化作業や地域ぐるみで防災組織を立ち上げるなどその一員として活動している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の方々と「さくら会」の中で認知症サポーター養成講座を行ったり、清掃活動、資源ゴミ捨て、地域の祭りの手伝いなど利用者と共に出向き、理解や支援の方法を見てもらう機会をつくるようにしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議の中で、事例の報告をおこなったり、「さくら会」やホームの敬老会などに参加してもらい、利用者の生活や取り組みを見てもらい、意見をいただいている。	行政や包括職員・地域や家族の代表・入居者が参加する会議では、2ヶ月ごとのホーム情報を発信し、DVDなどを使い、入居者の普段の姿を紹介している。9月には敬老会を兼ねた会議を盛大に開催し、参加者とホームがより身近なものとなっている。会議は地域の情報を収集する機会でもあり、参加者からより多くの意見や提案が出るよう働きかけている。	現在ホーム内で開催されている会議だが、次回から別棟で実施することであり、参加者に今まで同様開始前にホームに立ち寄り、入居者の様子を確かめてもらうことで、会議内容の把握に繋がるものと思われる。また、議事録の記録方法については、職員間で検討しより詳細でわかりやすいものとされることを期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	サービスや運営上の不明点などは市へ確認し、相談をするようにしている。運営推進会議を通し、実情やケアの取り組みかた等も伝えるようにしている。	行政担当者には運営推進会議への参加協力が得られており、質問事項があればその都度確認している。また、包括職員からは会議の中で、119番通報の仕方や心得などについてわかりやすい説明を受けるなど、良好な関係が構築されている。	運営推進会議は行政担当者と顔を合わせるせつかくの機会でもあり、市の動向や福祉に関する事など、発言の機会を設定しながらサービスの向上に繋げていかれることが期待される。
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	社内外の研修をとおし、身体拘束への理解を深めケアに取り組むようにしているが、全ての職員の共通認識とはなっていない。	研修会の中で虐待を含め身体拘束に関して共有の機会を持つ他、施設長や管理者は日頃から報道された事例などもあげ意思統一を図っている。開錠された玄関をはじめ、デッキなど自由に外気に触れる空間があり、『一つ屋根の下で出会った入居者』が自分らしい時間を過ごされている。夕方に不穏になられた方がいつものコースを足早に散歩され、その姿を温かく見守る職員の姿からホームの日常を感じ取れるようであった。	施設長や管理者は、入居者へ職員の後ろからの声かけについてその都度指導を行うなど、真摯に改善点を語っている。今後も入居者同士が、また、入居者と職員が『ゆっくり一緒に楽しみながら』『私のままで暮らせる』ホーム作りに尽力される事を期待したい。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	研修等で学ぶ機会を持ち、また現場の中では疑問点を話すこと、実習受け入れを通し、第三者の意見をもらう等で振り返りの機会としている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	研修等で制度について学ぶ機会は設けている。実際に制度を利用している方はいるが、ホームの支援を利用しているものではない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居時や改定時において、当ホームのケアへの考え方、看取りに対する考え方の説明を行い同意を得ている。また終末期の事前協議書を用い、家族の意見等を再確認している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	主に面会時に意見や要望などを小まめに聞くように心掛けている。年に数回家族会の総会があるため、その際に家族のみで意見を出し合うことで、実際の意見を反映させるようにしている。	入居者の要望は普段の関わりの中で聞き取っており、特に言葉に出されない方については、職員がチームワークを持って思いに応えるよう努力している。家族の意見・要望などは、運営推進会議や来訪時、家族会など様々な機会で見解が出しやすい雰囲気心がけ、率直に出してもらえるようにしている。また、外部の相談窓口についても説明を行っている。	今後は検討されているアンケートについて、職員の意見なども反映した内容にすることで、更にホーム運営に活かされるものと思われる。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	全体会の中で、職員の意見を出し合う機会を設けている。現場の中での細かい意見はホーム内の勉強会で話し合うようにしている。	全体会議や月1回実施されるホーム内研修会の中で職員の意見や提案を確認している。また、職員連絡ノートを活用した意見・提案の確認や情報の共有が行われており、内容からも職員のホームへの愛情や向上心が伝わってきた。勉強会についてはどのような内容を希望するのかなど、アンケートをとって決定されている。運営者や施設長も日々の業務に入り、入居者と職員と直接関わり泣き笑いを共にしながらサービスの向上、職場環境の整備に努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	課業に基づき、それぞれの等級での役割の確認、振り返りが出来るようなシステムは作っているが、現状として、それを効果的に使用できていない面がある。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	個々の実績や実務年数、目標にあわせ、実践者研修やリーダー研修等の社外研修を受けるようにしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域密着型サービス八代ブロック会、災害時の連携システム等でネットワークづくりを行っている。ブロック会では月に1度の研修会や忘年会等で交流を図り、又管理者会議を年に数回行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居相談の時点で本人の状態、不安な面や要望等は時間をかけて聞くようにしている。本人にあわせた入居までのサービスの導入の仕方、入居時は本人が安心できることを第一に考え夜勤者以外に一名待機をつけるようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	相談の時点で家族の思いや不安を吐き出してもらえるように、じっくり話を聴き、その思いを受けとめるように努めている。細かい要望を共有できるようにし、安心してもらえるよう関係づくりを行っている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	電話相談や見学の時点で、その他のサービス利用も含めた対応に努めている。空室があるグループホームがあれば紹介等も行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	大家族のように一緒に時間を共有したり、相談したり場面もあれば、介助を要する場面では介護をする、されるの関係になっている面もある。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	細かい事でもご家族に報告や相談をするようにしており、一緒に考えるように努めている。家族がホームへ足を運びやすいよう、家族と職員のコミュニケーションも大切に考えている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人の希望や状況に応じて馴染みの場所に行くなどしてはいるが、介護度が上がっている利用者に関してはホーム内の生活が主であるため、ホームへ出向いてもらっていることが多い。	入居者にとって大切な家族との関係が途切れないよう、ホームへの面会や盆・正月をはじめとした自宅への帰省を働きかけている。また、日常生活の中で好みの湯温での入浴や食事の提供などこれまでの習慣にも対応している。	馴染みの人や場所に加え、今後は特技やこだわり・趣味など本人が大切にしてきた事を可能な限り継続して支援していただきたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士で相談したり、一緒に何かをされている場面では見守ることに努め、必要に応じ介護者が対応している。また利用者同士のコミュニケーションが取れない方、苦手な方に関しては職員がフォローしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	ホームを退去された方に関しても、相談に応じたり、その後のサービスへ繋いだりもしている。また、初盆などにお参りに行ったり、家族が遊びにこられたりもする。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	まず第一に今の本人の思いを否定しない事に努めている。その中で思いに添えることは可能な限り行い、思いが伝えられない方には表情や、今までの生活から本人本位で検討するが、難しい面もある。	一人ひとりの今の思いを大切に、職員は入居者に寄り添う身近な存在であることに誇りを持ってケアにあたっている。その中で把握した思いや意向は職員間で共有を図りながら、プラン作成に繋げている。思いや暮らし方については、今後も家族の意見も聞きながら本人本位に検討を行って、最良の支援に繋げていきたいとしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時にしっかり経過の把握には努めているが、入居されてからも、継続的に担当職員を中心に本人、家族との関係を築きながら、情報をとっている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	情報を共有するために日々の記録に、すこしの変化や言葉を残すようにし、現状の把握に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	計画作成担当者を中心に、本人、家族、ケア担当者等で話し合いをし、プランへ反映させている。家族が来ることができない利用者に対しては、ホーム側が出向いていくこともある。	本人・家族の意見や要望、職員の提案を活かしたプランは、半年ごとの見直しを基本としているが、体調の変化など必要があればその都度行っている。計画作成担当者は家族に説明をする際、わかり易い言葉で語りかけながら進めており、途中質問を確認しながら承認を得ている。また、家族の状況によっては自宅を訪問し、プランの話し合いや説明を行っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	様々な実践や変化、気づきは、日々の記録へ書くことに努めている。特に必要なことにはアンダーラインを引き情報を共有しており、それを基に統一したケア、又計画の見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	隣接の宅老所に行き、お茶をしたり、同法人内のデイサービスへ散歩に出かけたり、その時々状況で対応している。勤務時間なども利用者の状況に応じて調整をするなどの工夫をしている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域住民が職員やよく散歩する利用者の顔なども知ってもらえるようになり、見守ってもらえている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人の状態に合わせ、職員がかかりつけ医に電話や出向いて相談へいくなど、本人に適切な医療を受けられるように努めている。家族と受診を同行したり、家族のみでの受診時は状況が伝わるようにメモを渡すなどで対応している。	入居前からのかかりつけ医を引き続き支援し、これまでの関係性を大事にしている。家族に受診依頼をすることで、入居者の現状把握とコミュニケーションの機会とし、家族の状況によってはホーム側が柔軟に対応している。外来受診が困難な場合には、往診という形をとり、歯科医も同様に往診により対応している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	気になったことはその時点でホームの看護職や訪問看護師に相談するようにしており、適切な受診にもつながっている。訪問看護師の週に1度の健康チェックにより、アドバイスも受けている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	認知症の方の入院受け入れは現在も難しい面もあり、入院時は安心して治療できるように担当医や看護師長へ相談をしている。また必要時は家族と協力してこまめに病院へ足を運び出来る範囲で協力をしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	希望があれば看取りを行う事を契約時に説明し同意を得ている。又終末期事前協議書に家族の現時点での意向を記入してもらう等を行い、看取りに入る前は家族とホーム側で話し合いを行い、家族の要望を聞き、チームとして支援できるよう努めている。	入居開始時に終末期支援に関わるホームの方針を説明し、入居者の様子を見ながら定期的に家族の気持ちを確認している。本年度は、最期を自宅で迎えてもらいたいと願う家族の意向により、医師や訪問看護の協力を得て看取り支援が行われている。まずは入居者本人に思いをはせ、これまでの生活ぶりからどう支援するかに焦点をあて、職員が交替で自宅を訪れながら最期を見送っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	社内外の研修で急変や初期対応にたいしては定期的な勉強をしているが、全ての職員が実践力を身に付けているかは確認できていない。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	防火管理者を中心に法人内で年に2回防災訓練をおこなっている。適切に避難をするために、避難ルートをきちんと確保するよう自主点検表を用い職員全体に意識づけを行っている。	春・秋、年2回火災を想定した総合訓練を実施している。今回11月の訓練では、隣接する系列施設を出火元として現在使用している夜間専用の連絡網がこのままでいいのかを検証するなど、目的を明らかにしている。日々の安全点検の実施により、火を出さないことを第一に職員の意識向上を図り、地域防災の要として編成部隊に加入し、連携を深めている。	今後は地震や台風などの自然災害についても定期的に机上訓練などで共有することが必要と思われる。また、地元消防団との連携に再び尽力されることを期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	本人の人格を尊重し、本人にとって心地の良い言葉遣いとなるように努めているが十分ではない部分がある。	入居者がこれまでの生活スタイルをそのまま発揮できるような環境作りが理念である『我のままに』に活かされており、入居者の尊厳を守り、尊ぶことを支援の基本としている。呼称も入居時に本人・家族に「どう呼ばれたいか？、どう呼ばれたらうれしいか？」また、逆に「呼んでほしくない言い方はないか？」など、細やかに選択肢を投げかけ決定している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	思いを表現できる方に関してはその都度話を聴き、希望に添えるように努めているが、介護者側の決定になってしまっている面も多々ある。介護度の重い方には特に意思を確認するという視点が薄い部分がある。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	それぞれのペースを大切にできるよう心掛けているが、職員に合わせて動いてもらっているのが現状ではないかと思われる。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	家族の希望や本人の希望にあわせ美容室にいたり、訪問カットで散髪している。その人らしいおしゃれが出来ているのか難しい面もあるが、服装や洗面などの身だしなみは心がけ支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	その時々で利用者と一緒に茶碗を片付けたりは行っているが、出来る利用者が少なくなっている。その方に合わせた食事の量や、季節の物、好みの物などを提供し、食事を楽しめるようにしている。	事前に献立を立てるのではなく、食材を見て入居者の意見を聞きながらその日の料理を決定している。調理担当者は併設施設の料理を参考にしたり、食の進み具合を見ながら入居者の好みを判断し、日々の調理に反映している。朝食と昼食でテーブル席を変更して雰囲気を変えたり、新鮮卵の配達日に合わせ生食用として活用するなど食へのこだわりが見られる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人ひとりの状態や力、習慣に合わせ、形態や、量を工夫したり、柔軟に対応できるように努めている。必要な方には水分のチェック表を用い、水分量が適切に確保できるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	必要な方には、歯科往診で口腔マッサージを定期的に行っており、職員も指導やアドバイスを受けて対応している。自身で出来る方には本人の状況に合わせ声かけを行うが、十分でない部分もある。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人ひとりの排泄のパターンやサインを見逃さないように声かけや誘導を行っている。必要時と思われるときは排泄パターンを見直すなど、失敗がすくなくなるよう努めている。	排泄パターンは必要に応じ見直しを行い、一人ひとりの現状に合った排泄支援に努めている。また、排泄用品についても昼・夜間で使い分けながら日中は、トイレでの排泄を基本としている。職員の連絡ノートからは、誘導や声かけ、現状の排泄用品の継続や変更について意見・気づきなど共有や周知徹底を記す内容が確認された。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	個々に応じた水分の調整、下剤の使用方法なども主治医に相談しながら行っている。便秘の原因や影響については職員の共通認識となるよう理解を深めていく必要がある。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	それぞれの好みのお湯の温度や室温の調整などの工夫、浴槽に入れない方は足浴をしながら温まってもらうなどの工夫はしている。本人の希望やタイミングに添えてない面も見られる。	週3回実施される入浴は、その都度湯を入れ替え、ぬるめや熱めなど希望に応じた湯温で取り組み、むくみや皮膚疾患時は足浴を支援している。また、汚染時はその都度シャワー浴なども取り入れながら清潔を保ち気持ちよく過ごせるように努めている。拒否の方へはタイミングや声かけを工夫したり、安心される職員の勤務に合わせて入浴日を設定している。	菖蒲や柚子の季節風呂支援に加え、今後は身近な材料を使った変わり湯(ヨモギ・茶葉・ヒノキなど)への取り組みも楽しみに繋げる一案と思われる。取り組みに期待したい。また、浴室の窓の棚に置かれた物品については、収納することで更に寛げる入浴に繋がるものと思われる。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	本人の状態に合わせ、日中でも休めるよう支援している。本人が安心して眠れるよう、室温や寝具の調整、灯かりなども柔軟に対応し、入床、起床時間も状況に応じ対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	症状の変化を確認し、状態に合わせ主治医に相談し、服薬支援に努めている。服用薬品名シートなどで確認できるようにしているが、全ての職員が目的や副作用の理解をしているかは十分でない。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	入居時から本人の性格、生活歴などの情報で、役割、楽しみごとなどの支援に努めているが、十分ではない。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	散歩や買い物などは日常的な外出の機会となっていはいはいるが、本人の希望にそえてない部分や、希望を言えない方への支援が出来ていない面がある。本年度の敬老会は家族や運営推進委員の方と一緒にホテルで会食をし、普段とは違う時間を過ごす事が出来た。	近隣の散歩や買物、「ふれあい花畑」など地域の方々と交流できる外出を入居者の状況や天候に応じ支援している。なかなか全員で外出できる機会は少なくなっている現状であるが、地域代表者も集う運営推進会議メンバーや家族と共に、9月には地元ホテルを会場として敬老会を開催し(季節柄お月見の演出もあり)、食事や出し物で和やかな時間を過ごしている。また、体調面から参加できなかった方へも職員の気持ちを込めた花束と寄せ書きを送り、ホテル同様の心を込めた敬老会が企画された。	今後も庭先やデッキを活用し、外気浴やお茶の時間、田畑の季節の移り変わりを楽しむ時間など継続して支援されることを期待したい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お財布をもって自分で支払いができる方がほぼいないため、外出時も職員が支払いをしているのが現状である。そのため本人が金を持つ大切さなどへの理解が薄くなってきている面がある。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人が自ら手紙を書いたり、電話をすることは日常的にないが、家族より本人へ葉書などが送られてくることはある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用部分の玄関には職員が季節の花を飾ったり、毎年家族の方が緑のカーテンを談話室の外に植えてもらったり、季節を感じることができる。換気、室温等も状況に合わせて調整しているが、バタバタとする時間、職員数が多い時もあり、音の配慮を見過ごすことがある。	これまで知らなかった者同士、一つ屋根の下での出会いを大切に、家庭的な雰囲気での共用空間作りに努めている。また、職員が持参した庭先の花が季節感をもたらしている。デッキには寝具と共に、足元も気持ち良いようルームシューズも洗濯し干されている光景が印象的であった。職員のメリハリのある語りかけ、笑顔を持って生き生きと業務にあたる姿は入居者や来訪者にとっても何よりの居心地のよい空間となっている。	デッキに干されている寝具やシューズなど日常の光景を是非家族へも発信頂きたい。安心や入居者への思いを更に共有できると思われる。また、経年と共に物品も増えていくことから、掲示物の破損なども含め定期的な見直しを行われることに期待したい。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	廊下、縁側、談話室など、ソファや椅子を置き、それぞれが思い思いに過ごせる空間にしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人の馴染みのものや心地のよい物を家族と相談して用いるようにし、空間づくりに努めている。	入居時には馴染みの品の必要性について説明を行う他、職員が自宅を訪れ持ち込みの品と一緒に確認するなど細やかな支援である。家具や使い慣れた小物などが置かれた部屋は、職員によって掃除や換気、歩行や車椅子の動きを妨げないような安全面にも十分注意を行っている。広さや間取りがそれぞれ異なる居室は、民家の持つ温もりを残しながら一人ひとりにとって過ごしやすい空間となるような配慮が感じられた。	今後はタンス内の確認を家族へ働きかけることで、より本人にとって必要な品が把握できるものと思われる。取り組みに期待したい。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	本人がわかる、出来ることは職員で共有するように努め、出来るだけ見守れるようにし、本人の意思で行動できるようにしている。		